

第一ヨハネ書の福音 3

イエスが歩んだように歩む

I ヨハネ 2 : 1-6

1. わたしの子たちよ、これらのことを書くのは、あなたがたが罪を犯さないようになるためです。たとえ罪を犯しても、御父のもとに弁護者、正しい方、イエス・キリストがおられます。2. この方こそ、わたしたちの罪、いや、わたしたちの罪ばかりでなく、全世界の罪を償ういけにえです。3. わたしたちは、神の掟を守るなら、それによって、神を知っていることが分かります。4. 「神を知っている」と言いながら、神の掟を守らない者は、偽り者で、その人の内には真理はありません。5. しかし、神の言葉を守るなら、まことにその人の内には神の愛が実現しています。これによって、わたしたちが神の内にいることが分かります。6. 神の内にもいつもいると言う人は、イエスが歩まれたように自らも歩まなければなりません。

ヨハネの手紙は、読み方を間違えると、前後の趣旨が食い違って、まるで矛盾だらけの文章に聞こえます。その理由は一言で言うと、昔からの「キリスト教はこんなものだ」という通念に「引きずられる」からで、それを一度消してみると、案外、素直に読めるものです。それに加えて前後の思想の流れ——文脈を無視しないで読むことも大事です。

「あなたがたが罪を犯さないようになるためです」は、公式的に訳せば、「罪を全く犯さなくなるよう」（ $\mu\eta$ + アオリスト接続法）です。でもそのすぐ後に、「たとえ罪を犯しても」と続くのは、例外的「但し書き」にしても繋がりが悪く、疑問を覚えもします。訳文の拙さもありますが、前半の絶対的な否定が、無駄になるように感じられるのです。

最後の「イエスが歩まれたように自らも歩まなければなりません」も高い

目標としては、大きなチャレンジですけど、その前にある「**神の掟を守るなら**」という言葉と結びつけますと、神の掟を完璧に守って、イエス様と同じくらい清く生きて、初めて信仰者と言える……という意味に聞こえて、平凡人には不可能な「きれいごと」を歌い上げているような、調子の高い言葉に戸惑ったものです。

当惑の主な原因は、全体の趣旨を読み取れなかったことですが、訳文の言葉も、もう少し知恵が必要だったかと思います。

最初の「**罪を犯さないようになるためです**」という文は、「**罪の一つや二つ、また犯すくらいでもいい……**という“居座り”を打ち切れ」という、強い呼びかけであることが、ἵνα μὴ ἀμαρτήτετε (イナ・ミ・アマルティテ) という原文の意味から分かりました。パウロのローマ書に出る、「罪の一つも犯すくらい大胆に行こうか……」ἀμαρτήσωμεν (アマルティソメン) という意味に福音を曲げた連中と同じ考えを「イナ・ミ」so that you may not (think and act) で否定した句です——ローマ 6 : 15。そんな人たちが、ヨハネが教えた教会にも、現れ始めたのです。

もう一つは、「**神の掟を守る**」という訳し方、特に「**掟**」という言葉の持つ響きです。むしろ「**神が命じたことを本気で受け止める**」こと、自分への命令として、正面から受けるのが、τὰς ἐντολάς αὐτοῦ τηρῶμεν の意味だと思います。「守る」は、その受け止め方を変えないで「維持する」ことです。「掟」という日本語を教会用語にした人にも責任がありますね。

前回と同じく、訳語や表現のことが煩瑣に思えたら、そんなことより、この文章全体の流れがどこに向っているか……だけでも注意してください。ここは、「**模範的な完全な信仰者になれ**」という趣旨とは違うのです。ヨハネの趣旨は、3行目からあとの5行に集中しています。それは、**イエス・キリストの持つ意味**です。この方はいったいどなたか、という「福音」の宣言

にあります。それ以外のこと——あなたがどれだけ模範的クリスチャン像に近いか、生き方がどこまでイエスに似てきたか、罪を犯した数は人より少ないか、点数は合格か……とかには無いのです。

前回と同じように、ここの中心を見抜いて読み換えてみます。以下は新共同訳と少し響きも違いますし、中学校の英文和訳式とも違いますが「ヨハネの文章が私にはどう聞こえるか」自分流の言い換えです。

愛する友に書き送る。「罪を繰り返すほうが恵みが生きる」という輩と同じ考え違いをするな。しかし過って罪に足を取られた場合は、イエス・キリストがおられる。あなたが失った義しさを、彼がお持ちである。

あなたの力強い味方として、この方がいつもいて下さる。このイエス様が私たちの「犠牲」として清めの力をお持ちだ。私たちだけでなく、仲間の人間すべてを引き受けて、「犠牲」の効力を発揮なさる。

上に述べた「居直り組」とは逆に、「神を知っている」と言えるのは、神が命じた言葉を、正味自分への言葉として受け止めて、その受け止め方を変えない人である。「神を知っている」と公言するだけで、神が命じた内容を他人事のようにしか感じない人は偽者だ。真実とはおよそ関わりが無い。しかし、神の言葉を正味受け止める真剣さを変えない人であれば、神の愛は、その人の中にこそ目的を果たしたことになる。私たちが「神によって生きる」と言えるのは、このことで決まる。（意識+補足）

その後にあの「イエスが歩まれたように歩む」が出てきます。ここまでの流れから外れずに読めば、こういう意味になりましょうか。

「神によって生きる」と言えるのは、天の父の意志を全部、自分の生き方に込めたイエスと同じ受け止め方で、神が命じた言葉を、正面から自分への命令として受け止めることを変えない人である。

ヨハネの思想の流れや、この文の中心点を考えずに読んでいた青年時代の私の読み方は、「掟」をどれだけ忠実に守ったか、イエスの歩み方にどれだけ近づいたか……の反省と自己評価に終始していました。それだけ「高い目標」を望んでいるつもりで、自分でも感動し、人にも恥ずかしくないように努めたと言えます。しかし、実際には、「掟」を忠実に守っている自分に信頼したり、失望したりしていたのです。

今、ヨハネが捉えた福音の中心点——イエスを私自身の義しさとして受けることができ、天の父が命じた言葉を自分への呼びかけとして聞くことができて、「イエスが歩まれたように歩む」の内容も変わりました。私は「自分の義しさの成績」を信じることは止めて、「私が失った義しさを、彼がお持ちだ。私の力強い味方としてのイエスがおられる。私を清める「犠牲」を、私が捧げなくても、イエスがいてくださる！」という、ヨハネの歩み方で自分も歩んで、喜んでいます。

(2006/02/19)

《研究者のための注》

1. 普通は「罪を犯さないようになるため」と機械的に訳される ἵνα μὴ ἀμάρτητε の一句は、「『罪の一つも犯してみるか……』と考えることが無くなるように」の省略語法に近いと見ました。アオリスト接続法の用法としては、織田文法 247 頁の 2a. (1)、否定の接続詞 μὴ の用法としては、260 頁の 6c. に当たりますが、機械的に「罪を絶対一度も犯すことのないため」と言うより、「新たにまた罪を犯したりせぬため」という「点的アスペクトの否定」に、本文の 2 頁に補足してある “so that” のような「捻り」がかかっていると理解します。文法執筆の後で気づいたことです。私とは異なる理解（絶対罪を犯さなくなるよう）も可能です。
2. 新共同訳が「弁護者」と訳し、口語訳等で「助け主」の訳語で知られた「パラクリトス」παράκλητος は、ヨハネ 14 : 16, 15 : 26, 16 : 3 でイエスの口から語られた言葉です。外来語（ギリシャ語）ですが、当時のヘブライ語の文書に פִּרְקִיט の綴りが出ることを考えると、イエスご自身、「パラクリート」と発音されたのではないかと（織田

「ヨハネによる福音」51講)と思われます。語義については教文館の織田小辞典 429 頁 παράκλητος の項を参照。

3. 「(罪を)償ういけにえ」と訳されている語 ἰλασμός は、「慈悲深く赦す」意味の ἰλάσκομαι の名詞形で、神の側から準備して与えてくださる「罪の清めのいけにえ」を表わします。上記織田小辞典 268-269 頁を参照。
4. 「エンドリー」ἐντολή は ἐντέλλομαι (命じる) の名詞形なので、「掟」というよりは「命令、命じた内容」です。十戒の一つひとつをギリシャ人はこの語で表わしたので、邦訳では「掟」という訳語が定着しました。本来、天の父が「命じた」内容が ἐντολή で、「掟」と言う宗教概念は(ファリサイ派ならともかく)イエスの意図とは食い違っています。
5. 当日は結びの後に以下の言葉を加えました。「簡潔といえば簡潔□骨組みだけの短い“福音宣言”になりました。くだけた例話と、自分の生い立ちや努力の報告を並べた“長い説教”も価値がありますが、今はこれが限界です。ついに自分の書いた原稿も見えにくくなりました。両目の手術後の3月中旬を楽しみにしていますので、ご声援と祈りのお支えをお願いして終わります。」